

- 2065 式貴士「不思議の国のマドンナ」(式貴士『カンタン刑』(角川書店, 1982年, 角川文庫) p. 233-266)

ジロが、二人の前を走りすぎようとする、少女の一人が目をさまし、びっくりしたようにジロを見た。

白兎のジロは、チョッキの胸のポケットから懐中時計をとりだすと、
「大変だ。早くいかないと、ティータイムに遅れちゃう！」

p. 242

- 2066 澁澤龍彦『幻想博物誌』(河出書房新社, 1983年, 河出文庫)

『不思議の国のアリス』を読んだ方は、この物語のなかで、コーカス・レースという奇妙な競走ゲームをアリスや動物たちに提案する、ドードーという鳥がいたことを御記憶であろう。この鳥も、じつはルイス・キャロルの発明ではなく、実在の鳥なのである。

p. 49

- 2067 澁澤龍彦『夢のかたち 澁澤龍彦コレクション1』(河出書房新社, 1984年)

「王さまはいま、夢を見ていらっしゃる。だれの夢だと思うかね」

「そんなこと、分りっこないわ」

「なんと、きみの夢じゃないか。それで、もし王さまが夢を見おわたたら、きみはどこにいると思うかね」

「もちろん、いまいるところよ」

「そんなことはない。きみはどこにもいないんだ。だって、きみはただ、王さまの夢の中でだけ生きている存在にすぎないからさ。そこの王さまの目がさめたら、きみは消えちゃうんだ。ぱっと、蠟燭の火みたいにね」

「消えやしないわ。それに、あたしが王さまの夢の中の存在にすぎないのなら、あなたたちはどうなの。ぜひ教えていただきたいわ」

「右に同じさ。右に同じ、右に同じ！」

「しっ。王さまを起してしまうじゃありませんか、そんなに大声をあげたら」

p. 148-149

- 2068 澁澤龍彦『天使から怪物まで 澁澤龍彦コレクション3』(河出書房新社, 1985年)

そのまま行きかけた一角獣の目が、ひょっとアリスの上にとまりますと、一角獣はすぐにふり向いて、しばらく気味わるげにアリスを見つめていましたが、

「これは——なあん——だい？」と、とうとう最後にききました。

「これは子どもさ」とヘイアは待っていたとばかり、アリスを紹介しようと彼女の正面へやってきて答えました。両手をアングロサクソン風に彼女のほうへ差し出して、「きょう見つけたばかりなんだ。大きさは実物大、自然らしさは二倍だぜ！」

「おれはつねづね子どもなんて、おとぎ話のなかの怪物かとばかり思っていたよ」と一角獣はいいました、「生きてるのかい」

「口もきくよ」とヘイアがもったいぶっていいました。

一角獣は夢でもみるようにアリスを見ながら、「子ども、口をきいてみな」とい